

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	橋本陽介
主 論 文 題 名 : 物語における時間と話法の比較詩学—中国語と日本語を中心にして			
(内容の要旨) ●総論 「詩学」とは解釈学とは逆のアプローチで、言語学 (特に文体の分析) に基づき、ある解釈がどのようにして生まれるのかを探るものである。また、もし言語が思考を決定しているとすればそれはどのようにしてかということの問題とする「文化記号論」の基礎ともなる。「詩学」とよべるもののうち、文学の分野において成果を挙げたと言えるのはジュネットをはじめとする構造主義時代の物語論で、「物語の詩学」と呼ぶことができる。しかし物語論の興味の対象は物語の一般的構造であり、使用する言語においてどう異なってくるかという問いはほとんどなされていなかった。また、日本や中国でも物語論の術語を使用した構造分析は行われているが、欧米言語を元にした既存の理論を当て嵌めているだけである。論者が提案する「物語の比較詩学」の理論とは、テキスト言語学的な見地に基づき、個別言語における物語の言語使用を比較、分析することによって、その言語を使用して物語際の言語意識を明らかにしようとするものである。本論文では、まず第一章において既存の物語論の議論を振り返り、どのような議論がなされてきたのかについて検討する。そして第二章では物語における時間について、第三章では話法についてそれぞれ日本語と中国語という立場から議論する。  第一章 物語論の術語の再検討から比較詩学へ 「物語論」では、物語の一般的構造の記述が目指され、「語り手」「語る声」「視点(焦点化)」「語りの時間」など、今でも批評に使用される重要な概念が整理されたが、80年代以降は理論の更新が行われていない。そこで本稿では、欧米における既存の議論を再検討することにより、今後、言語間の比較を行うにあたってどこにさらなる開拓の余地があるかを探った。 まず、「物語」という語の定義は、時間の展開を持つ事象を言葉で語ったものと考えられることを見た。従って、物語論での主要な関心事は、物語を語るということはいかなることなのか、或いは物語における時間の展開とはどのようになっているのか、などになる。 そこで次に、「語り手」という概念に関する議論を整理し、その存在を措定する立場と否定する立場の議論を見ることによって、物語における創作主体に関する検討を行った。バルトやジュネットは、物語にもコミュニケーションモデルを導入し、「語り手」が「聞き手」にメッセージを送る形で物語が語られると考えた。一方でバンヴェニストやハンブルガー、バンフィールドなどは、このコミュニケーションモデルを否定し、真に物語っているのは「物語の機能」であると考えている。しかし、実際にハンブルガーやバンフィールドが否定しているのは、「現実の、人格的な」主体間のコミュニケーションである。バルトの理論はコミュニケーションモデルを取りながらも、「語り手」という存在を非人格的なものと考えているほか、ジュネットの理論でも、実体的な主体というよりは、物語世界外に措定される存在である。その意味では、この両者の立場は大きく異なっているものではないことを見た。少なくとも、現実の場に話し手と聞き手がいて、「いま」と「ここ」が定まっている場合と物語とでは、言語表現が異なるのである。さらに、シュタンツェルやチャットマンの理論では、「語り手」という存在を人格的なものと考えた。ただ、その場合にもやはり、「語り手」よりも上のランクとして「内包された作者」を導入しなくてはならない。「物語の機能」や「内包された作者」のランクは、物語を産み出す機能であり、非超越的な意味での作者、すなわち創作主体に関わってくることを述べた。ハンブルガーらとシュタンツェルらの違いは、物語世界やその中の登場人物、時間、語り手などを実体的なものとして捉えるかどうかの違いである。ハンブルガーらの理論では、創作主体としての「物語の機能」がすべてを産み出すが、これは「内包された作者」と似たものである。物語世界、人物、時間などを実体的なものとして捉える仕方は、実はそれを解釈する時の方法である。もし詩学の探求が、解釈学の反対を目指すものであるのならこの「物語の機能」、す			

なわち非超越的作者がどのように物語を作出するかを考えなくてはならない。また、本稿の目指す「比較詩学」では、個別言語を使用した際に生じる言語意識を問題とする。この言語意識とは非超越的作者の言語意識であるとした。

これを踏まえ「物語の時間」と「語る声」「視点」に関する既存の議論を検討した。その結果、既存の理論が英語やフランス語などの時制体系を前提としていることを論じた。また、物語の場合は、現実の会話のように「いま、ここ」が定まっている場合と時間の表し方が異なることを指摘した。「語る声」「視点」とは文法的には「話法」に関わる問題であるが、その理論も三人称代名詞と過去時制を常に用いる言語を前提として作られていることを見、日本語や中国語では必ずしも適用できなことを示した。この第一章によって、現行の物語論の歴史的総括を行い、その上で個別言語に注目した場合の新たな展開の可能性について論じた。

## 第二章 語りの位置と物語における時間

一貫して過去時制（小説によっては現在時制）が使用される英語やフランス語等の物語に対して、日本語の小説ではタ形（過去形）とル形（非過去形）が頻繁に交替で用いられることが知られている。その用法に関しては、言語学からのアプローチと物語論（ナラトロジー）からのアプローチから説明がされてきたが、現在までのところ、タ形とル形が交替する理由や、如何なる条件下でいずれかが選択されるかは厳密には考察されていない。とはいえ、日本語の書き手は一定の時間意識にそってタ形とル形を使用しているはずであり、無規則に使用しているわけではないはずである。この使い分けを分析できれば、日本語で物語を書くときの書き手の時間意識の分析にもつながると考えられる。そこで第二章では、まず日本語のタ形とル形の使用から、日本語物語における時間の展開について論じた。

言語学ではタ形は基本的にはテンスと考えられ、発話時点から見ての過去を表すとされる。物語論のモデルでも、過去に起こった物語を語っているというモデルが取られてきた。本稿では、これまでタ形とル形の交替現象において、物語を語る位置と語られる物語現在が同一時間軸に並んでいるという前提を批判した。そして語りの位置は同一時間軸上にあるのではなく、物語世界の外側にありながら、漸進的に進んでいく物語を俯瞰的に眺めながら語っていることを明らかにした。

歴史的な経緯としては、二葉亭四迷の『浮雲』の文体変遷を取り上げ、言文一致後の近現代小説はこの『浮雲』の語り方から、語り手の主体性を減退させたものであることを論じた。そして語りの位置と物語られる世界との位置関係は、『浮雲』第一篇と変わっておらず、物語現在が「現在」であるとした。こうすることによって、日本語のタ形とル形の交替は明確に捉えることができる。日本語で物語る際の言語意識としては、過去のことを語っているわけではないのである。

次に、経緯を踏まえた上で、日本語物語のル形とタ形の交替を文法的に説明した。まず、物語の現在を現在とする語り方（物語現在的語り）と非物語現在的語りに分け、非物語現在的語りの文法的特徴として、要約的・説明的になること、語りの場が一次的になること、直接話法が減ること、を挙げた。そして、物語現在的語りでは、ダイクシスは物語現在を中心としたものが使用可能であることを見、タ形とル形の交替を状態性述語と動作性述語に大別して論じた。状態性述語のタ形には、通常の会話文とは異なり物語現在の時間を進める機能があることを明らかにした。動作性述語の場合、タ形が基本的にはその動作の完了を表し、ル形は単にその動作行為を示すだけであるとし、さまざまな用法を説明した。これによって、日本語物語におけるタ形とル形の交替が説明でき、またそこから日本語で語る際の時間意識を明らかにした。

さらに、中国語で物語る際の時間意識の問題を論じた。中国語には文法形式としての時制がなく、形式からの分析が難しい。そこで、ダイクシスに注目すると共に、叙述の速度に注目し、「物語現在」が表されているかどうかという観点から、語りの位置と語られる物語世界との位置関係を考察した。中国語のダイクシスは、日本語と同じく、物語現在的語りの場合には物語現在を基準とすることを明らかにした。

また、アスペクト助詞の“了”の用法を、現実の会話での用法と対比することによって、物語における時間の展開の仕方を明らかにした。物語では現実の会話文に比べて、明らかに“了”の使用が少ないが、これも物語現在が基準となっているためである。その上で、“了”の付く文は事態の成立を点で把握する叙述法であり、“了”のないものはその動作行為そのものを示すということを明らかにした。さらに、“了”が文脈の中で果たす機能について論じた。

以上の事から、中国語物語においても、物語世界を目の前に置いて、漸進的に進む物語について叙述していることがわかる。物語世界内部での時間的展開は、ジュネット等の物語論ではほとんど議論されてこなかったが、本稿の議論で新たな地平を切り開いた。本稿のモデルを使用すれば、日本語や中国語小説の文体や構造を、既存の理論よりも明確に表すことができるので、批評等に応用することも可能であろう。また、中国語と日本語の対応関係も、本稿の議論から可能になるはずである。

### 第三章 語りの位置と話法

物語における「話法」はこれまで、「自由間接話法」と呼ばれる話法が、主に小説技巧の問題として論じられてきた。本研究では「話法」を、ある文が物語世界の外側からの語りであるのか、それとも内側に属するものなのかを表す文法カテゴリーであることを示した。このように考えると、「話法」の研究とは単なる技巧の問題ではなく、物語世界をどのような位置取りから語るのかという、より本質的な問題となる。まず、既存の話法分類のうち、「直接話法」の性質について日本語・中国語小説を英語等の小説と比較の上で検討した。その結論として、「直接話法」は「物語現在」に属し、「引用」ではないことを論じた。さらに「直接話法」以外の「自由直接話法」「自由間接話法」「間接話法」と分類されてきたものを、物語世界との「距離」という概念から、連続したものとして捉えた。この捉え方によって、物語の「話法」とは何なのかを示すとともに、文法形式の異なる言語間の比較を行う下地を作った。

次に、日本語の話法を英語等を元にした既存の理論と比較の上で分析した。英語等の小説では、基本的に物語世界の外側の位置に語りの位置が固定され、そこから客観的に眺められる。しかし、日本語ではその位置はしばしば物語の内部に移動する。その語る位置取りは、話法の分析からわかることを見、日本語に即した分析を行った。その結果日本語では、人物の視点に同化して語る場合と、その内的感情、内的言語に同化している場合があることが明らかになった。本研究では、このように人物の視点や内的感情、内的言語に同化する日本語の語りを「オーバーラップした語り」と呼んだ。そして、日本語で物語る際には、書き手の意識自体が物語世界の内部の特定の人物に同化しやすいということを、英語等との比較から明らかにした。

さらに、中国語における話法を英語や日本語と比較した。英語等の自由間接話法の翻訳からは、原文の人称に変更がないこと、微妙な話法を間接話法の方向に訳すことが多いこと、疑問文、感嘆文への翻訳は原文よりも距離がなくなることを指摘した。また、日本語の人物の視点にオーバーラップした語りを、人物の外側からの客観的位置からの語りにするか、内面のセリフであるかのように翻訳していることを見た。以上の翻訳例から鑑みても、中国語は基本的には英語等のように、外側からの客観的な語り方を好むが、人物の内的感情に同化する場合のみ、日本語のような「オーバーラップした語り」になると考えた。これを踏まえ、中国語小説における視点の取り方、内面への同化の仕方を明らかにした。

以上、第二章、第三章の分析によって、日本語や中国語を使用して物語る際にいかなる時間意識をもって語るのか、またいかなる位置から物語を語るのかを明らかにした。

#### ●総括

人間の思考は言語に規定されている部分がある。「詩学」では、ある言語を使用した際に、それがどのように思考を規定しているのかを明らかにしようとする。しかし実際には個別言語に着目した「比較詩学」はほとんど行われてきていない。本研究は、物語においてこの「比較詩学」を行おうとする点において、まったく新しい。日本語や中国語を使用して物語る際、書き手はどのような立ち位置から世界を語るのか、どのような時間の認識で語るのか。本研究によって、その理論の道筋が開けるはずである。

また、個別言語に注目した研究は、逆に言語を超えて通用する一般的な理論にも新たな視座をもたらす。現在まで、物語の一般理論は多く語られてきたが、中国語や日本語を分析対象とすることによって英語などを観察しただけでは気づくことのできなかつた点を指摘することが可能である。言語を超えて共通する部分は何なのか、個別言語によって変わってくる要素は何なのか、ということ問うことができる。これによってすでに飽和状態にあるように思われる物語の理論そのものを個別言語の視座から崩すことによって、より活性化した議論を巻き起こすことが期待できる。

さらに本研究によって提示するモデルは、派生的に翻訳論に寄与することが可能である。翻訳論においては、「日本語らしい」「中国語らしい」表現に翻訳することが求められるが、そもそもある表現がどうして日本語らしく、逆に直訳調はそうではないのかが理論的に捉えられることはそれほど多くない。「～語らしい」表現とはつまり、その言葉において無意識に作用している約束事である。申請者の研究では、中国語と日本語についての約束事を理論化することができる。

以上のように、本研究は個別言語によりそった物語の言語を明らかにすることができるだけでなく、その成果は多方面の分野にモデルを提供することが可能になるのである。